

宝の海から

白浜で出会った生きものたち

65

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

変わり者 キクメイシモドキ

田辺湾には沖縄のよう
なさんご礁の景観は広が
らないが、黒潮の影響を
受け、海水温も年間を通
して暖かいので、60種
以上のイサンゴ類が生
息している。代表的な約
30種を瀬戸臨海実験所水
族館で飼育展示してい
る。

どの世界にも変わり者
はいるもので、キクメイ
シモドキは生物学的にと
の特徴をとってみても、
とても変わったイサン
ゴの仲間である。その理
由の一つが、骨格が黒
いことだ。他のイサン
ゴ類は死んだら真っ白に
なり、砕けて白い砂浜を
造る。しかし、キクメイ
シモドキは生きていても
死んでも骨格が真っ黒の
ままである。黒色の正体
は、鉄分やメラニン色素
を多く含んでいるため

域も広い。黒潮流域の沖
縄地方をはじめ、太平洋
岸では千葉県まで、対馬
暖流の影響の強い日本海
沿岸でも能登まで分布す
る。また、冬季の水温が

死んでも暮る黒なサンゴ

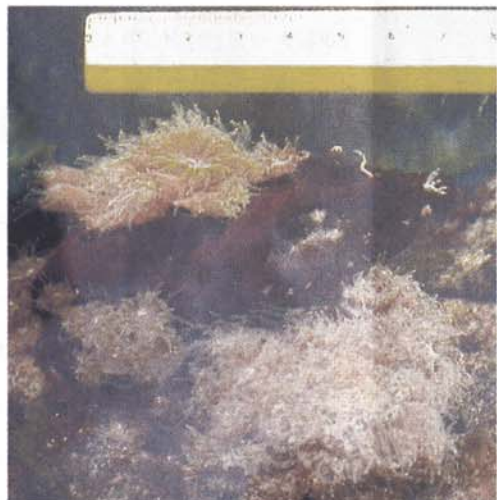


岩に付いた状態で打ち上がったキクメイシモドキ

低い瀬戸内海にも見られ
る。系統分類学的にはキ
クメイシモドキに所属させら
は、付着している岩石に
はがれたものばかり。サ
体には成長しない種類で

れているが、その中でも
1属1種として独特の分
類群である。近縁種が何
なのかまだよく分かって
いないのだ。

キクメイシモドキの群
体は、番所崎の岩礁を干
潮時に歩いているとよく
見つかる。その群集は、あ
まり立ち上がらない形状
で、むしろ平べったい。
このような形をしている
のは、流れが強く速い
湾の入り口なので、水流



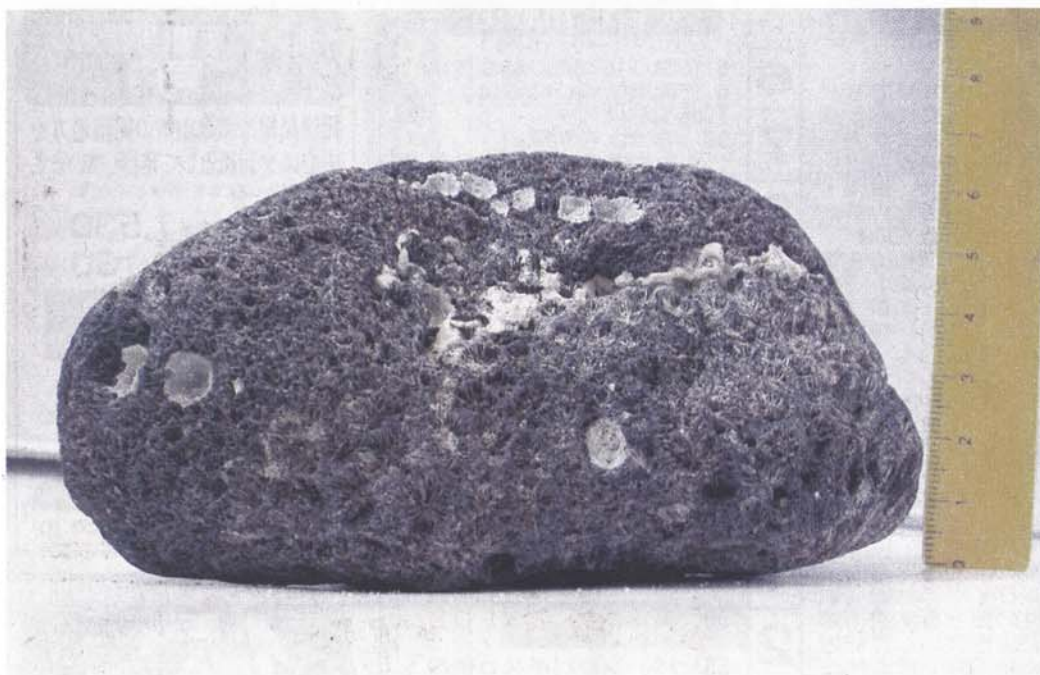
瀬戸臨海実験所水族館で飼育展示中の
生きたキクメイシモドキ

ある。このことだ。沖縄では、6
月に入ると、いままでにみ
たこともない大きな塊の
キクメイシモドキの群集
が打ち上がっていて驚い
言えることだ。

9月の生殖シーズン中
に、1群体が平均13回の
産卵を繰り返す。年間の
産卵数がサンゴ界随一と
言えることだ。これは、体
の成長よりも生殖の方に
エネルギーを投資すること
が分かった。その群集は
長さ12cm、短径8cm、
高さ5cmで重量が500g
以上もあった。以前に田
辺湾のキクメイシモドキ
の生殖時期を調べた琉球
大学の勝氏によると、夏
の水

は、キクメイシモドキは
さんご礁の中でマイナー
な存在で、湾内や陸水の
影響のあるよみなどが
主な生息場所だという。
このような場所は、光が
深い所にまで届きにくい
のと、深い所はたい積物
が多いので定着基盤が乏
しく生息環境が整って
いない場合が多いので、深
場ではなくて浅瀬で見ら
れる機会が多いことになる
そうだ。

さらに摂餌実験で、キ
クメイシモドキの群集へ
の餌の量を不足させると
産卵数が減少すること
だ。遺伝子解析もやっ
ておられ、興味深いこと
に、沖縄からタイまでの
熱帯型のグループと本州
の温帯型のグループに大
きく分けることができる
という。成体のいろいろ
な環境条件への耐性の強
さと生殖周期の同調が緩
やかなことが、高緯度地
帯を含めた環境変動の大
きな生息域での生存に成
功した理由であると推測
されている。結論として、一般のイ
サンゴ類の生息に適さ
ない場所にもたく潜り込
んだ種といえる。



2005年の冬に北浜に打ち上がったキクメイシモドキの大きな群集